

小林和男著「テレビを消そう」内外教育、時事通信社 2010年4月6日刊を読む

テレビを消そう

- 1 .テレビで長く働き大学でテレビ論を講義している私だが、学生にテレビを消せと呼び掛けている。食事の時のことだ。大学での体験から話そう。
- 2 .あまり成績の芳しくない学生がゼミに入れてほしいとやって来た。成績を理由に断ったのだが学生は「今まで何をやっても中途半端だった。根性をたたき直すために入れてほしい」と粘る。面白い。条件を付けた。ゼミの内容を毎週家に持ち帰り食事の時に両親に説明し、その結果を毎週レポートで提出するという条件だ。最初のレポートが面白かった。いつもはお笑い番組などを見ながら食事をする息子が突然“冷戦の崩壊”などと話し始めたから、親は笑ってまじめに取り合わなかったという。しかし息子は真剣だ。毎週報告しなければゼミから放り出される。息子の熱意に親が引き込まれ、親子で話し合う様子が生き生きとレポートに表れるようになった。学生の成長は目覚ましかった。
- 3 .1年半のゼミの後、学生は就職試験を受けた。成長ぶりを見ている私には企業はこんな若者を見逃さないだろうという確信があった。学生は希望の企業に合格した。報告に来た学生に、最終面接の朝、両親はどんな言葉で励ましたかと尋ねた。頑張れでも落ち着けでもなかった。「今までやってきたことを全部発揮してこい！」だったと言う。親子が対話を続けていたからこそ出た言葉だと思う。
- 4 .子供のころちゃぶ台を囲んでの家族の食事を思い出す。楽しい話もあったが、嫌な説教もあった。しかしその席で何と多くのことを学んだことか。ご飯を30回はかみ、一粒も残してはならないことから、人との付き合いのこつに至るまで、ちゃぶ台で学んだことが今の私をつくった。ゼミの学生に家庭を巻き込んだ課題を与えたのは親子の対話をもたらす教育効果を体験で知っているからだ。テレビを消して家族が食事をすれば親は子供の成長も悩みも感じ取れる。いじめを親が全く気が付かないなどということは起こらない。テレビを消した家族の食事の効果は大きいこと請け合いだ。

P1

[コメント]

地元、作新学院大学特任教授小林和男先生の家庭教育論。家庭教育は大切。但し、小林先生のようにきっかけを与える役割は先生も担うべきと考える。

- 2010年4月2日 林明夫記 -